

遠隔監視 5G対応

京西テクノス



「監視ボックス」を5G対応にし監視周期を従来の1秒から0.1秒に大幅に短縮した

スマートファクトリー提案

【立川】京西テクノス（東京都多摩市、臼井努社長）は、生産現場などの状況を監視するリモート監視ソリューション「Wi-VIS（ワイビイス）」事業を再構築した。各種センサーを接続・通信する機器「監視ボックス」を第5世代通信（5G）対応に刷新。監視周期を従来の1秒から0.1秒に大幅に短縮した「Wi-VIS II」とし、年100件の導入を目指す。

監視ボックスに任意のセンサーを接続し、取得データをサーバーに送信。さらに顧客のモバイル端末や京西テクノスの「グローバルサポートセンター」に送り監視する。同ボックスは汎用性に優れ、

から。初期導入にかかる費用は監視対象やボックス・センサー数などにより異なる。

Wi-VIS IIは、すでにダムの水門監視向けに納入済みで、福島県からは新型コロナウイルスワクチン保管庫内の温度監視で採用が決まった。今後こうした案件に加え、スマートファクトリーやスマートホスピタルといった分野の需要を開拓していく。

同社は製造工場・プラントの温湿度や電力・電圧・二酸化炭素（CO₂）濃度監視などに実績を持つ。自社で装置製造を手がけていることから、監視・運用に知見を生かせるのが強みだ。

さまざまなインターフェースに対応。サイズは幅75mm×奥行き90mm×高さ35mmで、従来品から約6割小型化した。監視・運営を同社サポートセンターに委託した際の月額費用は1万円（消費税抜き）